

文化・芸術



「肉屋店頭(ウッドストックにて)」

1923年ころ、木炭・紙
48・0センチ×54・0センチ

清水登之 (1887～1945年)

大川美術館企画展 「20世紀アートセレクション」から

《名画の扉》

欧州で西洋画を学ぶことが主流であった20世紀前半に米国に渡った日本人画家がいました。彼らは働きながら美術を学び、ときには厳しい労働条件や人種差別の中で生計を立て、米国美術界のリアリズムの影響を受けながら、自らの現実でもある民衆の姿と生活を共感を込めて描きました。

清水登之は栃木県から画家を目指して若くして渡米し、結婚のため一時帰国を挟んでおよそ17年もの間、同地で生活します。シアトルで資金をためこみ、ニューヨークへ移り、1917年から美術学校アート・スチューデント・リーグに学びました。ここでは当時夜間部を担当していたジョン・スローンに師事。傍観者的な視点の街の情景とそこに生きる人々を捉えた表現は、スローンから高い評価を得ました。

23年7月には転地療養と写生を兼ねて近郊の避暑地ウッドストックへ幼い息子を連れて滞在。肉屋を描いた本作では素描ながらつり下げられた肉や人物が量感をもって描かれ、日常の雑音まで伝わってきます。

(大谷)